

田代よいとこーその15ー 中津神社にまつわる話

小嶽明神

中津神社入り口の説明板によると、勧請年月は不詳だが、文治年間(平安時代末：約830年前)には存在していたとか。ただし、その頃は小嶽明神(こたけみょうじん)と言っていました。本殿は岩の上であり、この岩の丘を小嶽と言ったようです(写真1)。以前に「田代よいとこ」でご紹介した田代城・内藤氏の氏神でした。境内には東照宮(祭神：徳川家康)、八坂神社、稲荷社、金比羅社を祀っています。明治6年、八幡神社、日枝神社、浅間神社、蔵王権現社を合祀し、中津神社と改称、現在に至っています。

海軍との関係は？

中津神社の祭礼の時、鳥居の近くに「伊東祐享(いとうすけゆき)」という名が入った大きな幟(のぼり)が立つのをご存知でしたか？さて、この人はどんな人なのでしょう。そしてなぜ中津神社に・・・？なにか縁があるのでしょうか。

伊東祐享について調べたところ、次のようなことがわかってきました。

1843年(天保14年)鹿児島に生まれ、1914年(大正3年)没。明治27年、日清戦争が起こると聯合艦隊司令長官として、清国の丁汝昌(ていじょしょう)提督率いる艦隊と戦い、降伏させました。後、日露戦争においても海軍大将、元帥として海軍のトップに君臨した有名な軍人です。

ではなぜこの人の名が記された幟があるのか・・・？これもまた以前、本校の二宮金次郎の台座に「有馬良橘(ありまりょうきつ)」(明治時代の海軍大将)という名が刻されていたことについて「田代よいとこ」で紹介しましたが、そのこととも関係があるのではないのでしょうか。そして2人の海軍軍人(それもトップクラス)と田代を結ぶものがあるとしたらなんでしょう。それはズバリ、「横須賀水道」ではないのでしょうか。前号の「学校だより」5月号でも紹介しましたが、明治時代の日本は、富国強兵のスローガンのもと、軍備増強に突き進んでいました。海軍は良質な水を手に入れたいと願っていました。そこで中津川の水を横須賀の海軍基地へ送る「横須賀水道」が敷設されたわけですが、海軍の水源地竣工祝賀と銘打った当時の写真(写真2)が残っていることで、それが裏付けられるのではないのでしょうか。ここには海軍将官を迎えた小学生や村人たちが写っています。場所は半原の顕妙寺の下です。

中津川の流路の変遷

中津神社は、もともと中津川沿いにあったことから中津神社の称号を得たのですが、なぜ小嶽と呼ばれる岩山ができたかということ、中津川の流路の変化に関係があるようです。半原在住の民俗学者：大塚博夫氏の論文「愛川・私のふるさと」(『愛川町農協三十年史』昭和53年)から一部を抜粋します。

「田代にあっては、中津川の流れの変遷がきわだっています。太古の中津川は、馬渡で南に向きを変えず、そのまま富士居山(注1)の麓をまわって流れていたと思われます。そして、その流れは田代の土地をときに南流し、ときに東流して、やわらかな表土層をおし流し、地形を崩壊させて(注2)、土砂の搬出と河床の移動をくり返しました。(中略)田代集落の中央に孤立している天台山(てんでんやま)(注3)や、中津神社(小嶽明神)の神座(かみくら)である岩山、天王森などは、多年にわたる河床の移動や地形の変化によって、田代地区の古い地核がとりのこされたものです。」(p.159)

実際、航空写真を見ても、富士居山と天台山の間にかつての中津川が流れていたというのは頷けますし、中津神社の本殿がある岩山も中津川の中洲の一部として取り残された一部なのでしょう。今回は、天台山をめぐる話題をお届けします。



写真1 ↑



写真2 →

【注1】田代城(現：愛川中学校)裏の富士山型の山。

【注2】崩壊地をザレ、ザリ、ザル等と呼ぶ土地が多い。ザルソウ(残草は当て字)のザルも多分これでしょう。「ソウ」は「所(ショ、ソ)」か？

【注3】「てんでんやま」は、田んぼの中などにぽつんと立っている小山・丘で、全国各地にあるそうです。「てんでんばらばら」に存在するという意味でしょうか？

◆参考文献 『愛川町農協三十年史』(上記)※写真2も

『愛川町郷土誌』(愛川町 昭和57年)他

◆取材協力 (順不同、敬称略) 山口秀雄 大矢俊介 小島櫻禮 山口研一